事例2

奈良県
天理市

オンライン英会話授業を導入。充実した英語教育で過疎地の学校の特色化を図る

奈良県天理市では、文部科学省「全国学力・学習状況調査」などの結果分析に基づき、教育長以下、現場の教職員が課題を共有し、基本的な生活習慣の確立や表現力の向上などに力を入れる。「当たり前」の施策を地道に継続するとともに、過疎化が進む地域にある小学校でオンライン英会話授業をスタートするなど、新しい取り組みにも積極的にチャレンジしている。

奈良県天理市プロフィール

◎1954年、3町・3村が合併し、天理教教会本部の所在地として、全国初の宗教団体名を冠した市が誕生した。ＪＲや私鉄、幹線道路が通る交通の要所。三角縁神獣鏡が33面も出土した「黒塚古墳」など多数の古墳が点在する。
◎人口…約6万7000人　◎面積…86.3㎢
◎市立学校数…小学校9校、中学校4校　◎児童生徒数…4,191人
◎電話…0743-63-1001（代表）
◎ＵＲＬ…http://www.city.tenri.nara.jp/kakuka/kyouikuiinkai/

教育長の戦略

調査分析で課題を「見える化」し、学力向上につながる取り組みを策定

天理市教育委員会　教育長　**森継　隆**

明確な統計データを共有し具体的な教育施策を検討

天理市は、古墳や神社が数多く点在する歴史豊かな地域であり、音楽やスポーツなどの活動も盛んです。私は2015年に教育長に就任して以来、この魅力あふれる天理がさらに発展していくことに貢献できる子どもの育成を目指してきました。

本市ではここ数年、学力が伸び悩む傾向にあります。文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果でも無回答が目立つなど課題が見られ、書く力を含めた自己表現力を高める必要があると強く感じています。

現場の先生方と足並みをそろえて対策を進めるためにまず必要なのは、説得力のあるデータを提示し、課題意識を共有することです。そこで、「全国学力・学習状況調査」や奈良県が独自に実施する学力調査について結果分析を進めてきました。

最も注目したのは、基本的な生活習慣に関するデータです。まず、大阪府茨木市の「『一人も見捨てへん』教育」*を参考に、課題の「見える化」を図るため、就寝・起床時刻や朝食、宿題など6項目の回答を4段階で得点化（24点満点）し、その合計値を3つの群に分けました（**図1**）。

そして、各群の「全国学力・学習状況調査」の平均正答率を全国平均と比べたところ、基本的生活習慣の得点が高い群ほど、学力点も高いことが分かりました。こうして生活習慣の乱れが学力にも大きな影響を与えていることが、明確になりました。

テレビ・ゲーム・携帯電話（スマートフォン）に触れる合計時間を見ると、本市の子どもは国や県の平均を上回っていました。同様に、平均正答率との相関を分析すると、メディアとの接触時間が短いほど、学力が高いことも分かりました。それらの統計データを、教委、学校、保護者と、教育に携わるすべての人たちで共有し、具体的な施策を講じています。

基本的な生活習慣の確立が学力向上につながる

生活習慣については、子ども一人ひとりの調査結果を得点化し、そのデータを活用して個別指導につなげるよう各校に伝え、家庭にも協力を呼びかけています。2016年度はさらに、子どもが自分の毎日の生活習

＊志水宏吉編著、茨木市教育委員会著『「一人も見捨てへん」教育』（東洋館出版社）より。

慣を数値化してグラフで表すなどの「見える化」を進めるとともに、「ノーテレビ・デー」を実施するなど、より具体的な施策を検討しています。

「基本は授業」という考えから、授業改善にも取り組んでいます。「全国学力･学習状況調査」の結果を見ると、「授業の冒頭で目標を示す」「最後に学習内容を振り返る」を行ったかという設問の肯定率が、児童・生徒では低かったのに対し、教員側はそれらを実施していると認識していることが分かりました。このギャップを解消するために、「めあて」と「振り返り」の指導を徹底するように働きかけたところ、早くも小学校では授業理解度の向上が見られています。

書く力を含めた自己表現力が弱いという課題については、国語力の指導の充実を図るため、国語の授業改善を進めるとともに、読書の推進にも力を入れています。

例えば、読んだ本の書名や感想を記録する**「読書手帳」**（**図２**）を導入しました。昨年度は、20冊読むと、地域の協賛していただいたファーストフード店でフライドポテトをもらえるというシステムが子どもたちに好評で、全校で進んで取り組んだ学校もあります。また、学習の成果を披露する場として、スピーチ大会などを独自に実施する学校も現れています。

さらに、自己表現を含むコミュニケーション力の向上をねらいとして、2016年５月、ベネッセと連携して天理市立福住小学校の５・６年生を対象に**オンライン英会話授業**を始めました。私が実際に授業で、英語によるリアルなコミュニケーションが交わされている様子を見た時、この活動は子どもたちの将来にとってよい経験になると強く感じました。今後、同校での実践を他校に広げる可能性も探りたいと考えています。

「当たり前」のことを全員ができるまで継続する

あらゆる教育施策の最終的な目標を一言で表すと、「子どもたちに学校が楽しいと思ってもらうこと」に尽きると思います。今後は、「全国学力･学習状況調査」の「学校に行くのは楽しいと思いますか」の質問項目の肯定率を高める施策も検討していきたいと考えています。

学校が楽しい場であるためには、子どもたちが夢を語れる環境であることが大切です。そのためには、まず先生方に夢を語ってほしいと思います。先生方が育てたい子ども像を自由に語り合う中で、学校の雰囲気は大きく変わっていくことでしょう。

もりつぐ・たかし　大阪大学大学院理学研究科博士前期課程数学専攻修了。奈良県立山辺高校、郡山高校、奈良高校、橿原高校、二階堂高校勤務を経て、2014年、奈良県立高取国際高校校長に着任。2015年から現職。

そして、オンライン英会話授業のような、新しい試みに積極的に挑戦し、子どもが楽しく学べる環境づくりをするとともに、地道な努力も大切にしていきます。今、最も力を入れている基本的な生活習慣の確立に向けた施策は、ごく当たり前のことです。すべての子どもができるようになるまで継続し、学びの基礎を築いていきたいと考えています。

図1　基本的生活習慣と学力との関係

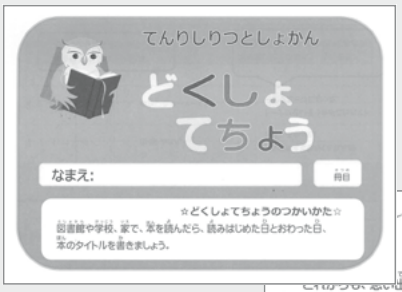
■2015年度小学校６年生

基本的生活習慣の得点群	平均学力点と全国平均との差	人数の割合
上位（20点以上）	＋8.4	32％
中位（16点～19点）	-0.1	50％
下位（15点以下）	-12.4	18％

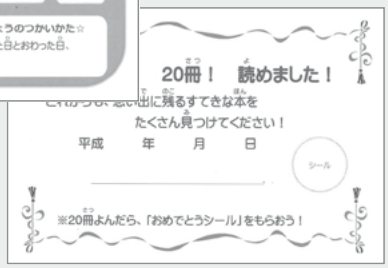
〈質問項目〉❶朝食を毎日食べていますか
❷毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか
❸毎日、同じくらいの時刻に起きていますか
❹学校の宿題をしていますか
❺普段、どれくらいＴＶを見ていますか
❻普段、どれくらいゲームをしていますか

＊天理市教育委員会提供資料を基に編集部で作成

図2　「読書手帳」



手帳には、読んだ本の書名や感想を書く欄があり、20冊読んだら、市立図書館か学校でシールを貼ってもらえる。↙



↘それを協賛したファーストフード店へ持っていくと、無料でフライドポテトがもらえるというシステム。

＊天理市教育委員会提供資料をそのまま掲載

教育委員会の施策

表現力育成と過疎地の学校存続のため、特色ある英語教育を展開

天理市教育委員会

家庭へのリーフレット配布で生活習慣の確立に注力

天理市教育委員会では、文部科学省「全国学力・学習状況調査」、並びに「奈良県学力・学習状況調査」の結果を分析して課題を洗い出し、それらの解決に向けて、2015年度に新たな教育施策を打ち出した。

早急に解決すべき課題の１つは、基本的な生活習慣の定着だ。従来、生活習慣に関する指導は各校に委ねてきたが、学力向上の土台となる規則正しい生活習慣をすべての子どもに確立させることを目指し、市としての指導方針を策定した。

この課題解決には保護者の協力が欠かせない。そのため、指導方針に基づいたリーフレットを作成し、小・中学生のいる全家庭に配布した。

リーフレットには、子どもの学びの習慣化に向けたポイントを示すとともに、生活習慣と「全国学力・学習状況調査」の平均正答率に相関があることを示すグラフを載せて、学力向上には生活習慣が重要であることを訴えた（**図３**）。学校教育課の吉岡昌則課長は、次のように説明する。

「以前は、どの家庭でも就寝時刻があまり変わらないなど、生活習慣に統一感がありました。ところが、近年は保護者の価値観やライフスタイルが多様化し、それが子どもの生活にも影響しています。そうした状況を踏まえ、各家庭で今一度見直していただきたいことをまとめました」

国語の授業改善などでアウトプットする力を育成

様々な調査結果から、表現力に課題があることも分かっている。そこで、国語の指導に特化した研究会を立ち上げ、個々の学校で取り組んできた良い実践を共有するなど、国語力向上の取り組みにも力を注ぐ。

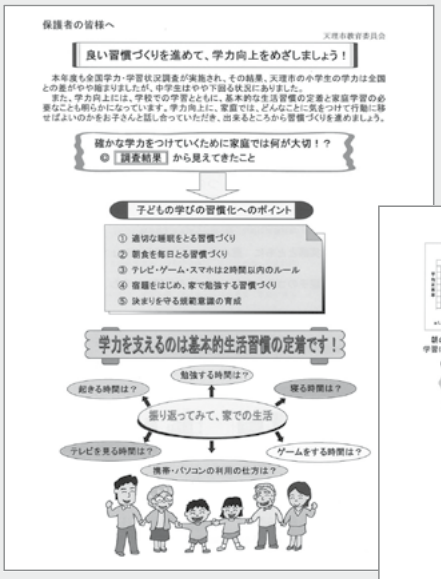
自己表現力が高まれば、友だちとの相互理解が深まり、人間関係も良くなっていく。その結果、一人ひとりの自尊感情が高まり、不登校やいじめといった問題が少なくなることも期待している。

「自分や友人、そして地域の良さを発信できるコミュニケーション力を育む中で、『自分が大好き、友だちが大好き、ふるさとが大好き』という心を育てることが最終的なねらいです。そうした力を持つことが、より

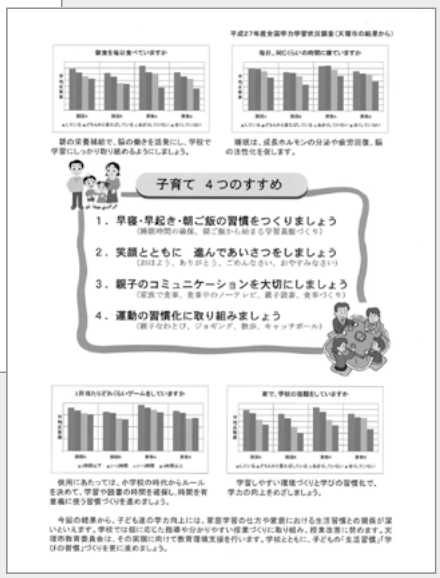
学校教育課課長
吉岡昌則
よしおか・まさのり
奈良県内の公立小学校教諭、学校教育課勤務を経て、2014年度から現職。

学校教育課
指導主事
笹尾美香
ささお・みか
奈良県内の公立小学校教諭を経て、2016年度から現職。

図3　規則正しい生活習慣定着を啓発する保護者向けリーフレット



子どもの学びの習慣化のポイントとして、①適切な睡眠をとる習慣づくり、②朝食を毎日とる習慣づくりなど、５つを挙げた。



生活習慣の乱れが、学力にも反映されることを、「全国学力・学習状況調査」の結果を基に説明し、説得力を持たせた。

＊天理市教育委員会提供資料をそのまま掲載

良く生きていくためには欠かせないと捉えています」（吉岡課長）

授業では、まず正確に読んだり聞いたりすることを大切にし、その中で考えたり感じたりしたことを書いたり言い表したりする活動を重視している。こうした活動を通して、積極的にアウトプットする力や意欲を育てたいと考えている。学校教育課の笹尾美香指導主事は、活動のねらいを次のように説明する。

「自己の内面にとどまらず、考えを他者に伝えようとしたり、自分にできることを考えたりする力を身につけて、将来的に社会に貢献できる大人に育ってほしいと願っています」

オンライン英会話授業で表現する意欲や態度を育てる

コミュニケーション力育成の一環として、2016年度、天理市立福住小学校に英語教育を導入した。

「国語力向上の取り組みなどで表現力の育成に努めていますが、さらに英語というコミュニケーションツールを習得することで、コミュニケーションの対象を世界中の人々に広げたいと考えました」（吉岡課長）

2020年度には小学校高学年で英語が教科化され、2018年度には先行実施が始まる予定だ。まずは実践校でその対策にいち早く着手して効果を検証し、他校にも英語教育を広げていきたいという意図もある。

同校で取り組みを進めるに至った背景には、過疎化が著しい地域の実情がある。同校は市内東部の高原地域にある全校児童数37人の小規模校で、外部の人との接触が他地域と比べて限定されやすい環境にある。

「子どもたちは小集団の中で育つため、大集団に入ると、気後れしてしまいやすいことが課題です。大勢の人の前でも、自分や地域のことを堂々と語れるようになってほしいと考えています」（吉岡課長）

同校は、少子化や過疎化の進行により、今年度から一部の学年で複式学級の学級編成となっていた。

「学校は地域社会の核であり、地域の人たちも学校の存続を強く願っています。そのため、豊かな自然を生かした教育や、少人数だからこそできるきめ細かな指導とともに、他校より半歩先を進んだ特色のある教育として、英語教育を先行して実施することにしました」（吉岡課長）

その英語教育の１つとして導入されたのが、**オンライン英会話授業**だ。これは、インターネット電話サービス「Skype（スカイプ）」を利用して、海外に住むネイティブ講師による少人数の英会話レッスンを受けるという授業で、この授業を通して、英語を流暢に操る力に加えて、コミュニケーションに対する意欲や態度を育むことを最も重視している。

「適切な言葉が出てこなくても、表情や身振り、手振りで、相手に伝わることも多いものです。小学生の時からそうした経験を積み重ねていけば、外の世界に出た時にも、尻込みをせずに積極的に表現できるようになるでしょう」（吉岡課長）

ALTによる外国語活動も行っているが、ALTはある程度、日本語を理解できるため、子どもたちは困った時には日本語で伝えることができる。その点、オンライン英会話授業の講師は、日本語をあまり理解していない海外在住の外国人である。自分の英語が伝わらなかったり、相手の言葉が理解できなかったりと、本当に困った場面に遭遇してこそ、有意義な学習ができると考えている。

自分で工夫するからこそ伝わる、分かる喜びがある

１回目のオンライン英会話の授業は、2016年５月に同校の５・６年生を対象に行われた。子どもたちの姿を通して、教育委員会はどのような手応えを感じたのか。

「子どもたちが自分の持つ知識を使って、精一杯、理解し、発信しようと、奮闘している姿が印象的でした。終了後に多くの子どもが『疲れた』と言っていましたが、脳をフル回転させ続けていたからこそ、そうした言葉が出てきたのでしょう。自分なりに工夫して表現したり、コミュニケーションを取ろうとしたりする意欲や態度が身につく学習だと感じました」（笹尾指導主事）

ありったけの英語力で意思疎通を図ろうとすることで、子どもたちが「分かった！」「伝わった！」という喜びを感じる場面も少なくなかったと、吉岡課長は話す。

「今年度の３学期からは、同校の３・４年生でもオンライン英会話授業を行う予定です。今後、この授業を３年生から卒業までの４年間積み上げるとしたら、卒業時には相当な力がつくと感じています」

今後は、同校での成果を踏まえて、他校での実施や、同校と１小１中の関係にある天理市立福住中学校での実施も検討中だ。

「英語科教員がいる中学校では小学校とは少し事情が異なるので、授業の一部分に導入するなどの方法が考えられるかもしれません。その場合は、時間配分やレベル設定、１回あたりの人数なども再度検討する必要があると思います。また、2016年度末には、１年間の成果を検証するために、同校の５・６年生を対象に『GTEC Junior』*を実施する予定です。その結果も踏まえて、次年度以降の英語教育のあり方を検討していきたいと思います」（吉岡課長）

実践を積み重ねる中で子どもの変容をしっかり捉えた上で、次の施策につなげていく考えだ。

＊ベネッセから 2016 年冬リリース予定の、タブレット端末で受検する、小学生向けの４技能英語検定のこと。「できるようになったことへの丁寧な認め」でやる気を高められることに加え、４技能別のスコアで英語力の伸びが継続的に確認でき、中学校以降の「使える英語」の素地も養うことをねらいとする。（以上は 2016 年６月現在の情報です。今後変更になる可能性があります）

学校現場の実践

積極的にコミュニケーションする意欲・態度を、オンライン英会話で育む

天理市立福住小学校

◎1982（昭和57）年、２つの小学校が統合して開校。天理市東部の大和高原にあり、里山や田畑に囲まれる。田植えや森探検など、「氷室の郷土・福住」を知るための教育にも力を注ぐ。

校長　小西和子先生
児童数　37人
学級数　７学級(うち特別支援学級２、複式学級１)
電話　0743-69-2104
URL　http://ed.city.tenri.nara.jp/fukusumi-el/

「疲れたけど楽しかった！」20分間の英会話レッスン

５年生の３人は、パソコン画面の講師が話す英語を聞き取ろうと必死に耳をそばだてる。講師は子どもたちが聞き取りやすいようにはっきり発音しているが、話すスピードは普通の会話とあまり変わらない。子どもたちが知らない単語や表現も次々に出てくるが、何とか聞き取れた言葉をつなぎ合わせて理解しようと、子どもたちは一生懸命だ（**写真**）。

“○○chan, What is this? ”と、講師に呼びかけられた子どもはテキストを見て、“This is basketball.”と緊張気味に答えた。“Very good! ”と講師が満面の笑みで褒めると、子どもの表情がパッと和らぐ。その後も、テキスト以外の会話も交えながら話をしていく。子どもがどうしても理解できずに会話が止まった時は、横についている担任がヒントを出す。

少しも気を抜けない濃密なレッスンが終わった後、子どもたちに感想を聞くと、「あっという間だった」「すごく疲れたけど、楽しかった！」「英語が通じたのがうれしかった」という声が笑顔とともに返ってきた。

天理市立福住小学校では、ベネッセと連携し、2016年５月、５・６年生で**オンライン英会話授業***を始めた。これは、インターネット電話サービス「Skype」を利用して教室と海外在住のネイティブの講師とをつなぎ、英会話の授業を行うというもの。月２～３回、１組約20分間のレッスンで、年間20回のプログラムとなる。

写真　オンライン英会話授業を受ける５年生。ネイティブの講師が質問し、子どもが考えて話す場面が多く設けられた。3～4人が1組となり、1組約20分ずつ授業を受けた。Skypeの操作性を考慮し、今回はノートＰＣを使用したが、今後は大型モニターの活用を検討している。

講師は規定の研修を受けた上で、授業に臨んでいる。また、テキストは『Hi, friends!』に対応し、それよりもさらに実践的な内容だ。授業の基本は１対１だが、同校では子どもの学齢を考慮し、１対３、もしくは１対４とした。そのため、子どもは気持ちに少し余裕を持って考え、講師と会話することができたようだ。

外国語活動を通して深くやりとりする力を育てたい

同校の子どもは幼少期からあまり変わらない人間関係の中で育つため、初対面の人との交流に消極的という課題があった。そこで、2014年度から、相手の話をしっかり聞いて意見を述べ合う学習を国語の授業で行うなど、言語活動の充実を図ってきた。小西和子校長はこう説明する。

「言語活動の積み重ねにより、子どもたちは次第に自分の考えを表現できるようになってきました。ただ、もう一歩踏み込み、相手の考えを引き出して、深くやりとりをする力はまだまだでした。そこで、国語科と並行して2016年度からは英語にも力を入れ、コミュニケーション力をさらに高めようと考えました」

子どもの英語への関心が高まっていたことも、外国語活動に力を入れる理由の１つだ。2015年度、５・６年生を中心に「総合的な学習の時間」で、世界各地を自転車で旅する冒険家の西川昌徳氏とのSkype授業を行った。その中で、西川氏が立ち寄ったニュージーランドの子どもたちと交流する場面があり、英語を話

＊ベネッセが提供する「Online Speaking Training」のこと。基本はSkypeを活用したオンラインでのマンツーマンのプログラムで、主に中・高生を対象に、学習指導要領に沿って開発された教材を用いてレッスンを行う。CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）に基づき、レベルに応じて多彩なコンテンツを用意。

図4　福住小学校の英語教育

担任とALTとのチーム・ティーチング	全学年を対象に外国語活動の時間として実施。日本語を交えて子どもが楽しむことを重視した活動を展開。
オンライン英会話授業	5・6年生を対象に、月2～3回、年間 20 回実施予定。2016 年度の3学期からは3・4年生でも実施予定。
モジュール学習	全学年対象。週3回、始業前の 15 分間に、学年ごとに活動中心の外国語活動を実施。各学年の発達段階を考慮した内容とし、次の学年の学習に無理なくステップアップできるようにしている。
イングリッシュアワー	2016 年9月より実施予定。月1回、ＡＬＴを中心に、全校でゲームやダンスなどの活動を行う。異学年と交流することにより、自分から積極的にかかわろうとする姿勢を育むこともねらいとする。
その他	2016 年9月から、ＡＬＴの来校が週3回に増えるため、外国語活動以外の授業にも入ってもらったり、休み時間に一緒に遊んだりして、子どもたちが英語や異文化に親しむ機会を増やす。

＊福住小学校の提供資料を基に編集部で作成

すこと、外国人とコミュニケーションを取ることに意欲が高まっていく姿が見られたのだ。そうした折、天理市教育委員会から「ICTを活用した英語教育推進事業」の打診があり、その一環としてオンライン英会話授業を実施することに決めた。

週3回、活動中心のモジュール学習もスタート

今年度の４月からは、週３日、始業前15分間のモジュール学習も始めた。低･中学年では､デジタル教材『ゲンキイングリッシュ』を使ってダンスや歌などで英語に親しみ、高学年では、『Hi, friends!』を基にゲームやリスニングなどを年間計画に沿って行う。外国語活動主任の深川瑛莉香先生はそのねらいをこう語る。

「短時間でも日常的に英語に触れるモジュール学習で、英語への抵抗感をなくし、学習への意欲を高めたいと考えています。また、高学年では、外国語活動の授業で理解が不十分だった箇所を重点的に扱い、定着を図ることで、子どもが英語に自信を持てるように努めています」

ALTとの外国語活動は、現在は各学年とも月１回だが、この９月からALTの来校が週３日に増える。そのため、他教科の授業に入ってもらったり、英語でゲームなどをする「イングリッシュアワー」（月１回）を設けたりして、子どもが英語や異文化に親しむ機会を増やす予定だ（**図４**）。

多くのリソースを組み合わせ英語力や表現力を高める

オンライン英会話授業と外国語活動それぞれの位置づけについて、小西校長は次のように語る。

「外国語活動では、ALTは補助的な役割で、担任が主導して日本語も交えて楽しく活動することを目指しています。今後もこの形を継続する一方、オールイングリッシュのオンライン英会話授業では、積極的にコミュニケーションを取る力を養うとともに、より実践的な英語力を伸ばしていきたいと考えています」

１回目のオンライン英会話授業の様子を見た深川先生は、モジュール学習の内容とオンライン英会話授業とをうまく連動させることで、学習効果をさらに高めることができるのではないかと考えたという。

「授業では、“Can you ～？”など、学習していない表現も出てきます。子どもはやりとりの中で、何となく意味を感じ取って答えていました。モジュール学習でも同じ表現を扱うことで、より理解が深まるのではないかと思いました」（深川先生）

英語教育の充実により、授業以外でも英語を話す子どもが増えてきた。これをさらに、学校外にも広めたいと、山口忠幸教頭は語る。

「子どもが家庭で英語について話すことで、保護者や地域にも英語への関心が高まることを期待しています」

教員が外国語活動に意欲的になってきたことも､成果の１つだ。他方で、一連の活動をどう評価するかや、他学年の教員やALTとの連携をどう密にしていくかなどが、今後の課題だ。

また、奈良県には、奈良公園や大仏殿など外国人観光客が大勢訪れる名所や旧跡が多数ある。そうした場所を訪れて、英語を使って観光客と交流するといった活動も検討中だ。

「今回のオンライン英会話授業では、知らない表現があっても積極的にチャレンジして答えようとする意欲や態度が見られました。私が最も重視したいのは、相手に伝わる喜びを実感する中で、英語という言葉を楽しむこと。その視点を見失わないようにして、先生方や子どもたちと相談しながら取り組みを深めていきたいと思います」（小西校長）

校長
小西和子
こにし・かずこ
モットーは「子どもが笑顔でいられることが何よりも大事。そのために常に子どもの話に耳を傾ける」

教頭
山口忠幸
やまぐち・ただゆき
モットーは「楽しい学校をつくるために、子ども同士のコミュニケーションを大切にする」

教諭
深川瑛莉香
ふかがわ・えりか
外国語活動主任。５学年担任。モットーは「一人ひとりの個性を尊重し、その子どもの良さに寄り添った指導をする」